

(様式1)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度委託事業完了報告書【総括】

都道府県名	栃木県	番号	09
-------	-----	----	----

推進地区名	協力校名	児童生徒数
鹿沼市	さつきが丘小学校	643
足利市	山辺中学校	617

○ 実践研究の内容

1. 推進地域における取組

(1) 令和元年度の重点課題

- ① 各種学力調査の分析結果に基づく検証改善サイクルの自校化
- ② 教員の指導力向上に向けた取組 ～学習評価を踏まえた学習指導の工夫・改善～

(2) 研究の内容

① 「とちぎっ子学力アッププロジェクト」に関する取組内容

i 平成31年度（令和元年度）とちぎっ子学習状況調査

【目的】

本調査の実施により本県児童生徒の学力や学習の状況等を把握・分析し、児童生徒一人一人の課題を明確にするとともに、各学校が組織的に学習指導における検証改善サイクルの構築・運用に取り組むことにより、本県児童生徒の学力向上に資する。

【主な内容等】

- ・ 調査内容 : 教科に関する調査
 - ・ 小学校（国語、算数、理科）
 - ・ 中学校（国語、社会、数学、理科、英語）
- 生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査

- ・ 調査実施日 : 平成31年4月18日（木）
- ・ 参加校数 : 524校（小学校363校、中学校161校）
- ・ 参加人数 : 48,701名

【内訳】 小学校第4学年 : 16,345名、5学年 : 16,463名
中学校第2学年 : 15,893名

- ・ その他 : 6月27日（木）に結果資料を8月26日（月）に県全体の分析結果をまとめた報告書を各小・中学校及び各市町教育委員会に送付した。

ii 学力向上指導員派遣事業

【目的】

学校組織マネジメントや学習指導に豊富な知識と経験を有する学力向上指導員を、学習指導上の課題解決に向けて意欲的な市町に派遣し、課題解決に向けた市町教育委員会や学校の取組を支援することにより、本県全体の学力の向上を図る。

【主な内容等】

- ・ 9名の学力向上指導員を県内11市町79校に派遣した。
- ・ 市町教育委員会が作成した「学力向上指導員活用計画書」に基づき、派遣校を訪問し、各学校の課題解決に向けた検証改善サイクルの確実な運用等を支援した。

iii 学力向上推進リーダー配置事業

【目的】

小学校国語科と算数科の教科指導に実績のある教員を、「学力向上推進リーダー」に認定し、担当学校内の教員の指導力向上を図るための指導を可能とすることにより、小学校における学力の向上を図る。

【主な内容等】

- ・ 25名の学力向上推進リーダーを県内21市町83校に配置した。
- ・ 学力向上推進リーダーの資質・能力の向上に向け、県教育委員会主催の研修を年間10回実施した。

iv 学力調査結果活用研修会

【目的】

とちぎっ子学習状況調査や全国学力・学習状況調査の分析結果を踏まえ、県全体の状況を共有するとともに、学習指導の改善に関する説明や講話等を通して、各学校における学力向上に向けた取組の改善・充実を図る。

【対象】

県内小中学校学力向上担当者等（各校1～2名）

【主な内容等】

- ・ 小学校教員対象

開催日： 令和元年6月21日（金）

参加校及び参加人数：363校、412名

講師：文部科学省 国立教育政策研究所

教育課程研究センター研究開発部 教育課程調査官 笠井健一氏

- ・ 中学校教員対象

開催日： 令和元年7月4日（木）

参加校及び参加人数：163校、204名

講師：文部科学省 国立教育政策研究所

教育課程研究センター研究開発部 教育課程調査官 山田誠志氏

v 学力調査結果活用説明会

【目的】

全国学力・学習状況調査やとちぎっ子学習状況調査の分析結果から明らかになった課題を共有するとともに、その課題解決に向けた授業改善の在り方等に関する研修を通して、同一歩調で課題解決に取り組み、とちぎっ子学力アッププロジェクトの充実に資する。

【対象】

県教育委員会指導主事、市町教育委員会指導主事

【主な内容等】

- ・ 第1回 令和元年 9月 4日（水） 参加人数 48名
- ・ 第2回 令和元年 10月 10日（木） 参加人数 50名

講師 文部科学省 国立教育政策研究所
教育課程研究センター研究開発部

教育課程調査官 菊池英慈氏
学力調査官 教育課程調査官 佐藤寿仁氏

vi 指導資料及びリーフレット等の作成・配布

- ・ 平成31年度とちぎっ子学習状況調査報告書 : 1,320部
- ・ 平成31年度全国学力・学習状況調査結果資料 : 3,000部
- ・ 小学校国語科指導資料 : 1,300部
- ・ 保護者リーフレット : 小学校 42,600部、中学校 21,100部
- ・ 学力向上通信 : 毎月1号ホームページに掲載

vii 学力向上研究協議会（学力向上検証委員会）

【目的】

とちぎ学力向上推進事業（とちぎっ子学力アッププロジェクト）を検証し、今後の学力向上に関わる施策等について意見を述べ、県教育委員会が実施する学力向上対策の改善に資する。

【主な内容】

とちぎっ子学力アッププロジェクトに関する様々な施策等の検証を行った。また、検証結果等を基に、県教育委員会が推進する今後の学力向上対策の方向性について協議した。

	開催日	主な内容
第1回	令和元年 8月 28日（水）	・ 今年度の学力調査の分析結果について ・ 分析結果を踏まえた取組の方向性
第2回	令和元年 12月 9日（月）	・ 学力向上指導員派遣事業の検証
第3回	令和2年 2月 3日（月）	・ 施策等の検証 ・ 次年度以降の取組について

② 推進地区及び協力校に対する支援

i 各種学力調査の分析結果に基づく検証改善サイクルの自校化

・ 学校全体で取り組む課題の焦点化

学校には、調査実施後、学力調査に関する結果として多くのデータが送付される。学校では、データ分析を通して、多くの課題を見いだすことはできても、その要因分析や課題解決に向けた仮説の設定、改善を図るための具体策の検討及び実践など、学校全体の課題解決に向けた取組につながりにくい状況が見られる。

組織的な取組につなげるためには、学校全体で取り組む課題を絞り込み、共有することが重要であると考え、推進地区及び協力校に対して、学校課題と関連のある設問などの正答率や無解答率、反応率などの特徴を学校全体で確認することなどを通して、教科汎用性のある課題に焦点化し、課題に対する意識化を図った。

・ 各学校における検証改善サイクルの運用を支援する「学力向上通信」の作成・発信

「学校全体の取組につなげる課題の焦点化」や「年間を通じた取組の検証」など、それぞれの時期にタイムリーな内容を掲載した学力向上通信を作成し、県内全ての小中学校に対して、ホームページや文書など複数の手立てで情報を発信し、検証改善サイクルの確実な運用を支援した。

学力向上通信

ii 教員の指導力向上に向けた取組 ～学習評価を踏まえた学習指導の工夫・改善～

・ 指導資料の活用

協力校における授業研究や学習指導案作成の際に、「授業改善に向けた3つの視点（栃木県教育委員会 H27.11）」「授業改善に向けた3つの視点 Vol.2（栃木県教育委員会 H30.3）」「授業アイデア例（文部科学省）」などの指導資料を活用し、単元や本時のゴールを見据えて、本時の「めあて」を検討したり、教材・教具を工夫したりするなど、学習評価から授業改善を図ることを支援した。

・ 思考力・判断力・表現力等の育成に向けて

特に、思考力・判断力・表現力等については、子供が表現した内容から学習状況を把握して、評価をすることができなければ育成することは難しいと考える。そのため、評価規準を踏まえ、児童生徒の表現内容を評価する際の判断の基準を明確にすることの大切さについて、繰り返し指導・助言を行った。また、このことについては、推進地区における学習指導主任研修会などの機会に、協力校の実践を例示するなどして、地区内小中学校に周知を図った。

2. 推進地区における取組

(1) 鹿沼市における取組

- ① 指導体制の構築
- ② アドバイザーの配置
- ③ 協力校校内研修への指導・助言
 - i 本研究の概要の説明
 - ii 授業づくりにおける指導・助言
 - iii 振り返りを生かした授業づくり
 - ア 1時間の学びの過程を振り返る（授業をダイジェストで振り返る）
 - イ 児童が自らの学びを振り返る
 - ウ 授業展開の文節ごとに、既習事項や自らの思考を振り返る
- ④ 研究内容の一般化を目的とした研修会の実施
- ⑤ 小中での連携

(2) 足利市における取組

- ① わかる授業の展開
 - i 基礎的・基本的な内容を確実に身に付けるための指導の充実
 - ii 思考力・判断力・表現力等を育成するための指導の充実
 - iii 自ら学ぶ態度を育成し、学習意欲を高めるための指導の工夫
 - iv 縦と横の連携の充実
- ② 学びの成長の把握
 - i 一人一人の学習の習得状況を把握し、次の学習に生かす工夫
 - ii 指導目標に即した観点別の評価規準の改善
～ 児童生徒の学習状況の継続的、総合的な評価の工夫 ～
 - iii テストバッテリーや全国学力・学習状況調査等の結果分析及び活用
- ③ 共に学び合う人間関係づくり
 - i 一人一人の個性を尊重し、共に学び合う人間関係を育む学級経営
 - ii 意欲をもって学習に取り組める学習環境づくり
 - iii 教師と児童生徒、児童生徒同士の認め励ます言語環境づくり

3. 協力校における取組

(1) 鹿沼市立さつきが丘小学校における取組

- ① 子供の思考力・表現力の向上と学力の定着を目指した授業改善と指導力向上のための校内研修の実施
 - i 授業づくり
 - ii 「振り返り」を生かした授業改善
- ② 大学の研究者との効果的な連携・協力による指導の充実

(2) 足利市立山辺中学校における取組

- ① 自己有用感や学習意欲を高める学習支援の充実
～主体的・対話的で深い学びの視点からの授業づくりを通して～
 - i 新しいユニバーサルデザインの考え方に基づく、個に応じた指導の充実
 - ii 「できた、分かった」を実感できる振り返る活動の充実
- ② 「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善
 - i 授業構想シートの作成・活用
 - ii 学習評価からの授業改善
～自分の考えを分かりやすく表現する力の育成に向けて～

○ 実践研究の成果

1. 協力校における取組の成果

(1) 鹿沼市立さつきが丘小学校における取組の成果

昨年度に続き、学校課題を「子供と創る算数授業～主体的・対話的で深い学びを目指して」とし、校内研修等において、宇都宮大学教育学部牧野智彦先生から講話及び指導・助言をいただきながら、振り返りを生かした思考力・表現力の育成を柱に授業改善を進めている。全職員で振り返りの目的を明らかにし、3つの視点(①1時間の学びの過程を振り返る②児童が自らの学びを振り返る③授業展開の文節ごとに、既習事項や自らの思考を振り返る)を基に単元構想シートを作成し、授業の実践・検証を行ったことで、児童が1時間の学びを実感できるだけでなく教師も授業の評価がしやすくなり、何を改善すればねらった姿に近づけるかと考え、次時に生かすことができたことが、学力の向上につながったと考える。全国学力・学習状況調査等の質問紙調査からも、児童の変容や授業改善の成果を見ることができた。

また、市内の全小中学校を対象とした公開研究会を実施し客観的な意見を集約したことで、研究内容を見つめ直す機会となり、今後の研究の方向性がより明確になった。

(2) 足利市立山辺中学校における取組の成果

昨年度に続き、全教職員が、都県の先進校(東京都荒川区立中学校・埼玉県戸田市立小学校等)を視察している。視察を通して学んできた各校の優れた実践を参考にし、山辺中学校の実態に合うように実践と改善を繰り返しながら、自校の課題解決に向けて取り組んでいる。特に、「山辺中版ユニバーサルデザイン」を作成し、教室環境だけでなく、授業づくりの視点から、全ての生徒が主体的に学習に取り組むことができるよう、ヒントカードを取り入れるなど、適切な支援を行っている。

また、昨年度に続き、文部科学省小栗英樹調査官や早稲田大学教職大学院田中博之先生に校内研修において講話及び指導・助言をいただき、具体的な事例を基に「主体的な学びとはどのようなことか」「学習指導に生きる学習評価の工夫」等について学んだ。特に、今年度は、学習評価から授業を構想することについて、重点的に研究をしている。実践を通して、学習評価をすることの意義を全教科で確認し、指導改善につなげる取組を推進してきたことの意義は大きい。学習評価に対して認識を深めることは、学校全体の課題である「自分の考えを分かりやすく表現する力の育成」に向けた今後の取組にも大きく寄与すると考える。

2. 実践研究全体の成果

- 平成 31 年度全国学力・学習状況調査から、教科の枠組みが変更されたため、単純な比較はできないが、平成 30 年度と平成 31 年度調査の同一学年による比較を行うと、小学校算数を除く全ての教科で、全国平均正答率と県平均正答率の差が改善されている傾向がみられる。

【小学校】

	平成30年度	平成31年度
国語A	0.0	+0.2
国語B	-0.1	
算数A	-0.5	-1.4
算数B	-0.9	

【中学校】

	平成30年度	平成31年度
国語A	-0.4	+0.2
国語B	-0.6	
数学A	-1.5	-0.7
数学B	-0.8	

全国平均正答率と県平均正答率の差

- 県教育委員会の指導主事等が、授業研究会において指導・助言を行ったり、校内研修で講話・演習を行ったりすることで、学校の課題解決に向けた取組を支援することができた。
- 平成 30 年度 3 月に県教育委員会が作成したリーフレット「授業改善に向けた 3 つの視点 Vol. 2 ～学習評価を踏まえた授業の展開～」を軸として、市教育委員会と連携しながら協力校に関わることにより、「学習評価を踏まえた授業改善」に向けた取組の充実を図ることができた。
- これまでの全国学力・学習状況調査の分析結果から明らかになった国語科における課題解決に向けて、学力向上推進リーダーの実践を参考にした指導資料「授業改善プラン」を作成し、指導方法の改善・充実に向けた取組を推進することができた。

3. 取組の成果の普及

- 推進地域では、県教育委員会ホームページに「学力向上通信」等を掲載し、各市町教育委員会及び各学校における調査結果の適切な活用や検証改善サイクルの運用に関するタイムリーな情報を県内全ての市町教育委員会及び学校に発信した。
- 推進地域では、これまでの調査の分析結果から明らかになった県全体の課題解決を図るため、小学校国語科における学習指導の改善・充実に向けた指導資料「とちぎの子供の『確かな学力』向上のために 授業改善プラン」を作成し、県内全ての小学校に配布した。
- 推進地区では、研究授業を公開したり、分析結果をもとにした啓発資料を作成したりするなど、推進地区内の小・中学校に対して、取組成果の普及を図った。

4. 今後の課題

- 検証改善サイクルの確実な運用

県全体の状況や市町、学校等の実態を踏まえ、それぞれにおける組織的な取組の充実に向けて、結果の分析や課題の焦点化、検証の工夫など必要な支援を行い、市町教育委員会及び学校が調査結果を活用し、検証改善サイクルを確実に運用できることを目指す。

- ・ 「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を図ることを通して、新しい時代に必要となる資質・能力の育成

これまでに作成した指導資料等を研修で活用するとともに、本県が実施する「学力向上指導員派遣事業」や「学力向上推進リーダー配置事業」等を通して授業づくりを支援するなど、教員の指導力向上を目指す。

- ・ 市町教育委員会との連携強化

各学校における教育指導等の改善に向けた取組の充実に向けて、より一層、市町教育委員会との連携を密に図る必要がある。今後も、県教育委員会が推進する、とちぎっ子学力アッププロジェクトと市町教育委員会の学力向上に関する施策との整合性を大切にしつつ、市町教育委員会及び学校の課題解決に向けた主体的な取組を支援する。

(様式2)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度委託事業完了報告書【推進地区】

都道府県名	栃木県	番号	09
-------	-----	----	----

推進地区名	鹿沼市
-------	-----

○ 推進地区として実施した取組内容

1. 研究課題

○ 「振り返り」を生かした授業改善による思考力・表現力の育成

本推進地区では、授業づくりにおいて、授業が子供の「深い学び」となっているか、また学び合いにおいて、自己の考えを広げ深めることができているかといった、アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善を進めてきた。

これまで、アドバイザーによる講話や校内研修による授業づくりを通して、教員はこれらのことを理解することができたと考えるが、まだ十分に浸透していなかったり、調査結果に結びついていなかったりする等の課題が残った。

そこで、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業実践を行い、確かな振り返りを実施することで、子供の知識が構造化され、知識の定着につながるのではないかと、学びの過程を価値づけることで、学習することの意義を認識し自己の変容を自覚することができ、主体的な学びにつながるのではないかと、教師側からは、子供のよりよい振り返りをイメージして授業づくりをすることが授業改善につながるのではないかと考えた。平成30年度は、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業実践を行い、ワーキンググループによる「振り返りを生かした授業改善」の実践・検証を行ったり、算数科のねらいを達成するための授業づくりや主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善を行ったりすることを中心に研究を進めてきた。

平成31年度は、平成30年度の成果を基に、主体的・対話的で深い学びの実現による子供の思考力・表現力の育成を目指し、振り返りを生かした授業改善を具体的に進めていくことを研究の柱とする。子供の知識を構造化し知識の定着につなげるには、どのタイミングでどのように振り返りを行ったらよいのか、学びの過程を価値付け、学習することの意義を認識することで主体的な学びにつなげるためには、どのように振り返りをとらえ活用したらよいのか、子供の振り返りを次の授業にどう生かしたらよいのか等、振り返りを生かした授業改善の研究を具体的に進めていくこととした。

2. 研究課題への取組状況

(1) 指導体制の構築

大学の研究者、協力校の研究リーダー及び市教育委員会の担当による「学力向上推進協議会」

を設置し、研究の方向性や研究の評価等を協議したり、協力校への指導・助言をしたりした。

- ・研究の方向性及び内容の検討
- ・協力校の研究の方向性及び内容の検討
- ・研究内容の確認
- ・研究授業及び公開研究授業参観
- ・協力校における研究課題への取組状況の確認

(2) アドバイザーの配置

協力校と日常的に連携、協力しながら学力向上に対する指導・助言を専門的な観点から行うためのアドバイザーを配置した。

- ・アドバイザー：宇都宮大学教育学部准教授 牧野智彦先生

(3) 協力校校内研修への指導・助言

本研究では、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業実践を行うことと、振り返りを効果的に行い、それを授業改善につなげることによって、児童の思考力・表現力を育成することを目的としている。そこで、算数のねらいを大切にし、主体的・対話的で深い学びを実現する、との視点から授業を質的に改善し、児童の思考力・表現力を育成していくこと、そのために効果的な振り返りとはどのようなものかを検証・実践していくことに焦点化し、校内研修への指導・助言を行った。

ア 本研究の概要の説明

協力校の全教員を対象に、研究の趣旨や研究の指導体制、鹿沼市及び協力校の学力に関する現状と課題、研究課題、取組内容、成果等の把握と検証の手立て等について説明した。

イ 授業づくりにおける指導・助言

本研究における授業づくりについては、指導者が授業を構想する段階から関わり、協力校とともに実施していくことを基本とした。

協力校では、今までも学校課題で「思考力・表現力を育てる授業づくり」を行ってきた。主体的・対話的で深い学びになることを目指して、子供同士の対話を大切にすることで、子供同士のやりとりがスムーズになり、自分の考えをもって伝えることができるようになってきたが、子供同士がやりとりをすることに主眼がおかれがちになり、算数科としてのねらいがあいまいだったのではないかと、一部の子供の考えだけで授業が進んでしまっているのではないかと、という反省があった。

そこでまずは、授業者が教材研究をしっかりと行い、算数科として何を身につけたらよいのか、そのためには何を考えさせたらよいのかを明確にすることを大切にしたい。その上で「主体的・対話的で深い学び」にするためには、どのような手立てが必要か、その際、振り返りをどう生かしていくかという流れで、授業づくりを行っていくこととした。

思考力・表現力を育成するには、毎時間の授業の中で少しずつ積み重ねられるものに加えて、どの時間にどのような手立てで育成するのかと焦点化することで、よりの確な指導がで

きると考える。まずは単元を見通し、育てたい資質・能力をどの時間どのような活動を通して身につけさせたいのかを明確にしてから、1時間ごとの授業づくりを行っていった。

ウ 振り返りを生かした授業づくり

協力校では、主体的・対話的で深い学びの実現を通して思考力・表現力を育成していくために、基本的な授業づくりに加えて、振り返りの活用とその効果を検討・実践し、検証を繰り返すことで授業改善を行った。

まずは、振り返りについての共通理解を図り、単に授業後に感想を書かせるのではなく、目的意識をもった振り返りができるようにした。振り返りはその目的によって、振り返るタイミングや方法が変わってくる。そこで、下記の3つの視点で振り返りを行うこととし、それぞれの振り返りの目的を明らかにした。

① 1時間の学びの過程を振り返る（授業をダイジェストで振り返る）

授業の最後に1時間の学びの過程をダイジェストで振り返る活動を取り入れた。1時間の学び過程を振り返ることで、知識や技能の定着を図り学習効率の向上につなげたり、算数の授業では問題の正解を出すことが目的なのではなく、その過程が大切であることを価値付けたりすること、また、問題解決の過程を振り返ることで、問題解決の仕方、すなわち思考の流れを意識させ、思考力の育成につなげることを目的とした。さらに、学びの経験を児童に再確認させることで、学びの実感を得て、主体的な学びにつなげることも期待できると考えた。

② 児童が自らの学びを振り返る

全体で学びの過程を振り返った後、自らの学びを振り返る活動を取り入れた。1時間の授業での自らの成長を確認することで、自分の学びに自信をもったり、学びの価値を実感させたりすることで、主体性の育成につなげたり、学んだ結果を拡張し発展的に考える力につなげることを目的とした。そのために、振り返りを書く際には、ただ感想を書かせるのではなく、その目的によって視点を定め、効果的な振り返りとなるようにした。

また、振り返りとして書かれた内容を基に、子供の内面理解を深めると共に指導と評価の一体化として次時以降の授業づくりや指導に生かすことを目的とした。

③ 授業展開の文節ごとに、既習事項や自らの思考を振り返る

授業の中では、文節ごとに子供自らが既習の知識や経験を振り返ったり、自らの見方や考えを振り返ったりすることが意識せずに行われている。これを意識させることで、思考対象を焦点化し、子供が今何を考えたらいいのかを明確になること、また、子供の見方や考えを言語化させ、それを問い返し、素朴な表現を数学的表現に変容させることで、思考力の育成だけでなく、表現力の育成につなげることを目的とした。

(4) 研究内容の一般化を目的とした研修会の実施

市内小中学校教員を対象とし、協力校の研究内容やその成果を発表し、市内の小中学校へ研究

を一般化していくための研修会を開催した。

協力校の授業を公開することは、協力校の取組を市内の全小中学校に広めるとともに、協力校にとっても外部からの意見等を得ることによって、研究の更なる発展につなげることができると思う。



<公開研究会の内容>

研修会（講話）の様子

実施日	内容	学年・教材等	授業者・指導者等	参加者等
令和元年 11月22日	公開授業 授業研究会	第1学年「ひきざん」	○授業者：鹿沼市立さつきが丘小学校 齋藤 寛希教諭 ○指導者：宇都宮大学教職大学院教授 日野 圭子先生	さつきが丘小学校教員 市内小中学校教員等 計109名
		第3学年「分数」	○授業者：鹿沼市立さつきが丘小学校 竹之内 涉教諭 ○指導者：宇都宮大学教育学部准教授 牧野 智彦先生	
		第6学年「資料の調べ方」	○授業者：鹿沼市立さつきが丘小学校 篠原 洋美教諭 ○指導者：宇都宮大学教育学部講師 川上 貴先生	
	講話	「算数の授業における「振り返り」について」	○講師：宇都宮大学教育学部准教授 牧野 智彦先生	市内小中学校教員等 計81名

(5) 小中での連携

小学校の公開研究会に中学校の教員が参観し、また、中学校の研究授業には、同中学校区の小学校教員が参観して、それぞれの授業を見合う機会を設けた。お互いの授業を参観するだけでなく、授業研究において算数と数学の共通点と相違点やそれぞれの学校での授業の進め方等情報交換することで、小中それぞれの実態について把握し、小中のつながりを意識した指導ができるようにした。

	会場	参観学年・単元等
令和元年10月24日(木)	鹿沼市立東中学校	中学2年 1次関数
令和元年11月22日(金)	鹿沼市立さつきが丘小学校	小学1年 ひきざん、小学3年 分数 小学6年 資料の調べ方

3. 実践研究の成果の把握・検証

(1) 協力校の学力調査の結果から

ア 平成31年度全国学力・学習状況調査の結果から

小学校第6学年の児童を対象とした平成31年度全国学力・学習状況調査の教科に関する調査において、協力校の算数における平均正答率と全国平均正答率を比較すると、やや優れているという結果であった。

学習指導要領の領域の区分で比較すると、「数と計算」、「図形」および「数量関係」領域において全国と比較すると優れている状況にあり、また、評価の観点の区分では、全ての区分において全国と同等か優れている状況にあった。さらに、設問ごとに見ると、「2010年の市全体の水の使用量が1980年の市全体の水の使用量の何倍か読み取ることができる」及び「示された場面において、複数の数量から必要な数量を選び立式することができる」においては、全国より5

ポイント以上上回り、優れている状況にある。一方、「示された図形の面積の求め方を解釈し、その求め方の説明を記述できる」に課題があり、無解答率も他の設問に比べ高かった。

児童に対する質問紙調査の算数に関わる項目群では、ほぼ全ての項目で、全国の肯定的な回答の割合を上回っていた。特に、算数における思考力・表現力に関わる項目である「算数の問題の解き方が分からないときは、諦めずいろいろな方法を考えますか」の質問に対しては85%の児童が、「算数の授業で公式やきまりを習うとき、そのわけを理解するようにしていますか」の質問に対しては、92%の児童が、また、「算数の授業で問題の解き方や考え方が分かるようにノートに書いていますか」の質問に対しては、88%の児童が肯定的な回答をしていた。

イ 栃木県「とちぎっ子学習状況調査」の結果から

小学校第5学年の児童を対象とした栃木県「とちぎっ子学習状況調査」の教科に関する調査における協力校の算数の調査結果は、県の平均正答率をやや上回っている状況であった。児童に対する質問紙調査では、「授業の中で目標（めあて・ねらい）がしめされている」の質問に対して91%の児童が、「授業の最後に、学習したことを振り返る活動をよく行っている」の質問に対して91%の児童が、「算数の授業で問題の解き方や考え方が分かるようにノートに書いている」の質問に対して86%の児童が、肯定的に回答した。

全国学力・学習状況調査や栃木県「とちぎっ子学習状況調査」の結果から、どちらも国や県の平均をやや上回っており、一定の成果が図れたのではないかと考える。児童質問紙の結果を見ると、算数の授業に対して主体的に取り組んでいる姿や、授業のねらいや振り返りを大切にされた授業が行われていることがうかがわれ、ここからも児童の変容や授業改善の成果を見ることができたと考えられる。

一方、説明を記述する問題の正答率が全国平均よりも低く、無回答率も高かったことから、表現力の育成について、課題があることが分かった。

(2) 授業づくり及び振り返りを生かした授業改善から

授業づくりにおいては、授業を構想する段階からアドバイザーを含む指導者が関わることを基本として実施した。

単元を通して計画的に育てたい資質・能力を育成することや授業づくりのポイント、振り返りについての考え方を年度当初に共通理解を図ることで、協力校の教員が同一歩調で授業づくりに取り組むことができた。

また、主体的・対話的で深い学びとなるために、子供の姿から授業を見直したことで、子供主体の授業づくりにつなげることができた。単元構想シートを作成し、授業のゴールでの子供の姿を見据え、そのためにどのような活動が必要かと授業を構想したことで、小手先の技術ではなく、本質を大切にされた授業づくりができ、授業者の授業力の向上にもつながったのではないかと考える。

振り返りの活用に関しては、3つの視点を示し、授業に取り入れ、それが効果的であったかどうかを検証してきた。

まず、1時間の学びをダイジェストに振り返ることを取り入れたことにより、授業最後の板書で1時間の学びを振り返ることができるよう、問題解決の過程で発せられた子供の疑問や思考を板書

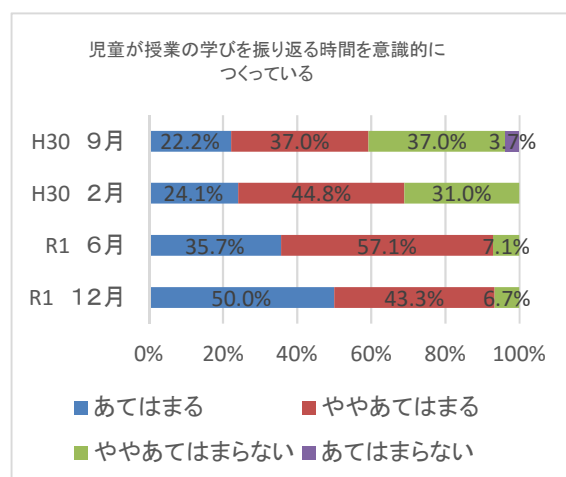
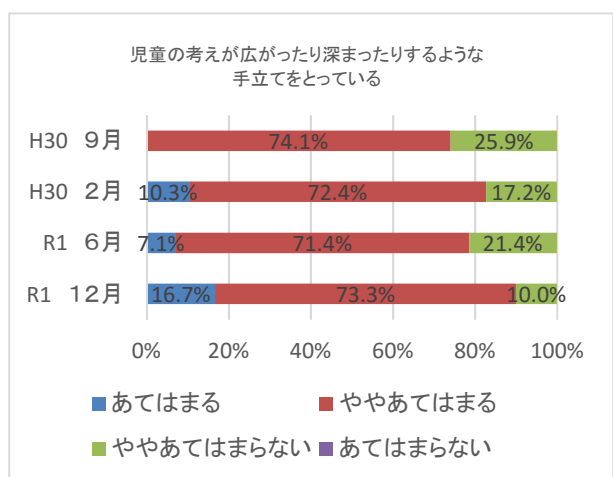
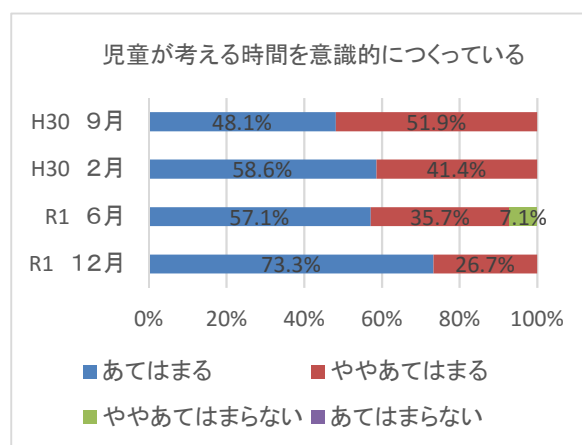
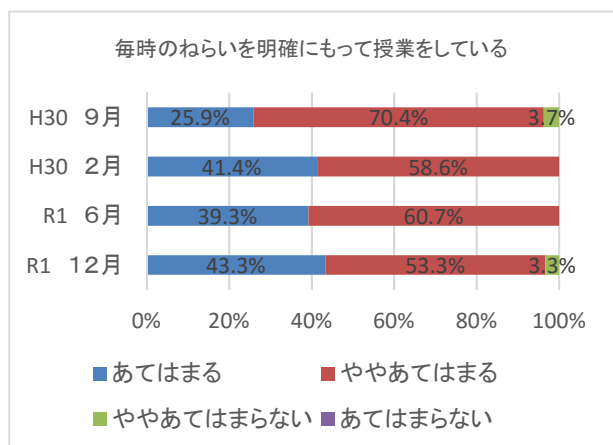
に残すようになり、その結果、問題解決の結果だけでなく解決の過程が大切にされるようになり、授業改善につながった。

次に、自らの学びを振り返り、記述することの成果として、教員が子供の学びを記述から見とることができ、それを授業改善につなげられた点が挙げられる。単元構想シートで授業後の児童の姿を明らかにしたことにより、教員も自分の授業の評価がしやすく、また何を改善すればねらった姿に近づけるかと考え、次時に生かすことができ、指導力の向上にもつながったと考える。

授業の展開の文節ごとに既習事項や自らの思考を振り返ることに関しては、今までその時間に必要な既習事項を掲示するなど教師が与えてしまったものを、子供自らが既習事項をノートなどを見返して振り返ることを意識させることで、教師に言われなくても必要に応じて自分で既習事項を振り返る姿が見られるようになった。このことは、問題解決の仕方を身に付けることにつながり、思考力の育成につながることが期待される。また、授業の展開の文節ごとに、「どうしてそう考えたのか」など思考の振り返りをさせたが、その際、不十分な子供の言葉を問い返し、できるだけ子供の言葉を使って授業を進めることを大切にしてきた。その結果、授業の中で教師の説明や解説の時間が減り、子供が思考する時間が増えてきた。このことも、思考力の育成につながると考える。

(3) 協力校におけるアンケート調査の結果から

協力校において教員の算数の授業に対する意識を調査するため、平成30年9月より継続して行った。結果は以下の通りである。



今年度12月の調査を平成30年度9月の調査と比べると、「あてはまる」と積極的な回答をし

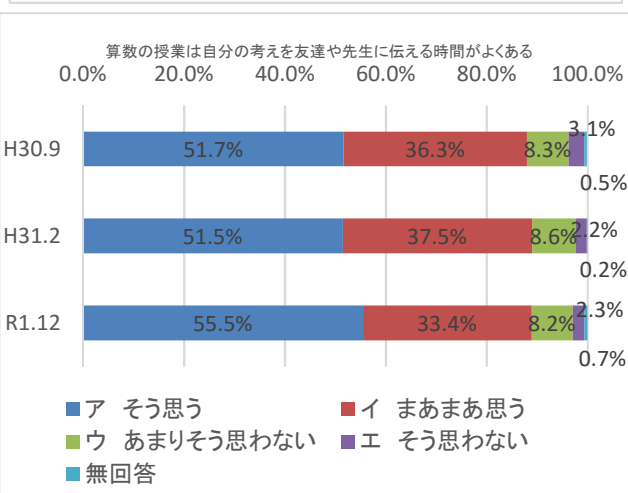
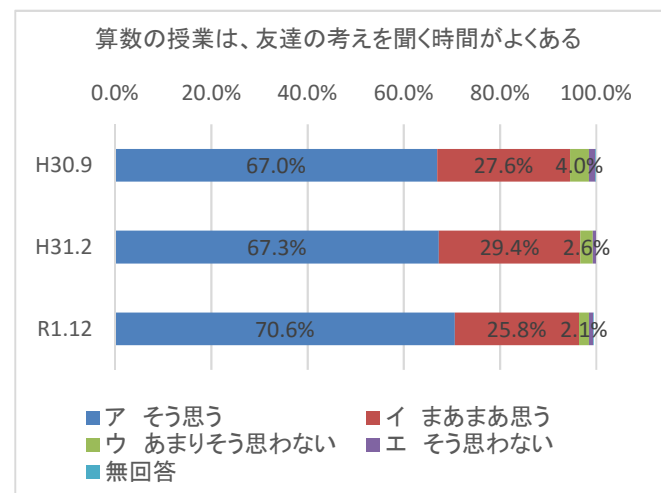
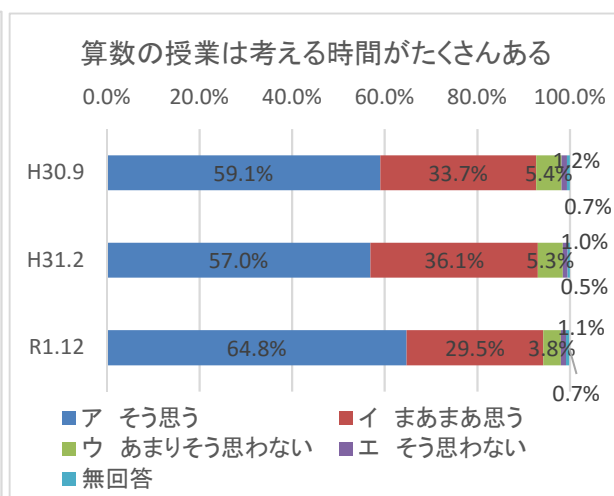
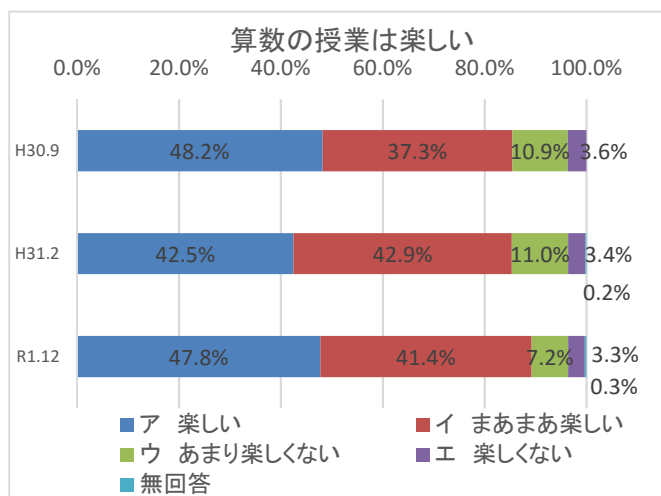
た教員が、「毎時のねらいを明確にもって授業をしている」の問いで17%、「児童が考える時間を意識的につくっている」の問いで25%割合が増えた。「児童の考えが広がったり深まったりするような手立てをとっている」の質問でも、平成30年9月の調査では「あてはまる」と回答した教員はいなかったが、令和元年12月の調査では、17%に増えた。ここから、授業者が授業のねらいや児童に何を考えさせたらよいのかということを大切に授業をつくっていかうとしている意識の高まりがうかがえる。また、令和元年12月における「児童が授業の学びを振り返る時間を意識的につくっている」の質問では93%が肯定的な回答をしており、振り返りを意識した授業が行われていることが分かった。

一方、「毎時のねらいを明確にもって授業をしている」、「児童の考えが広がったり深まったりするような手立てをとっている」、「児童が授業の学びを振り返る時間を意識的につくっている」の質問において「ややあてはまらない」と否定的な回答をしている教員もいることが分かった。

以上の結果より、協力校教員の授業づくりへの考えの変容が見られ、授業を構想していく力が育成されつつあることが分かる。一方、やや否定的な回答をしている教員もみられることから、一人一人の教員に分かりやすい、より具体的な研修や助言等についてさらに考えていく必要がある。

(4) 協力校における児童に対するアンケート調査の結果より

児童に対して、算数の授業についてのアンケート調査を、平成30年9月より継続的に行った。結果は下記の通りである。



今年度12月の調査の結果では、「算数の授業は楽しい」の問いで89%、「算数の授業は考える時間がたくさんある」の問いで94%、「算数の授業は、友達の考えを聞く時間がよくある」の質問で96%、「算数の授業は自分の考えを友達や先生に伝える時間がよくある」の質問で89%の児童が肯定的な回答をしている。ここから、算数の授業において、教員が思考力・表現力を意識した授業を行っていることがうかがえる。平成30年9月の結果と比較してみると、「算数の授業は楽しい」以外の項目において「そう思う」と積極的な回答をした児童が、いずれも3%以上増加している。ここからも算数の授業の中で、児童が自ら考えたり考えを伝え合ったりする活動を、意識的にやっていることがうかがえる。

一方、どの質問も「あまりそう思わない」「そう思わない」と否定的な回答をしている児童もいることから、一人一人が思考し、学びを深めているかどうか、一部の児童の考えで授業が進んでしまっていないか、という観点で今一度授業を見直す必要がある。

(5) 研究内容の一般化に向けて

研究内容の一般化を目的に、研修会を実施した。研修会では、協力校で実践した授業づくりの基本的な考えを市内の小中学校に伝えることを目的としたものであったため、研究授業・授業研究会だけでなく、「算数の授業における『振り返り』について」との題でアドバイザーによる講話を行った。

研究授業・授業研究会及び講話では、協力校で取り組んできた授業づくりや効果的な振り返りについて示され、参加者には一定の理解を得られたと考えている。またこの研修会では、小学校の教員だけでなく、中学校の教員も多く参加した。授業研究会では小・中の教員が同じグループの中で協議し、小中の連携にもつながった。参加者からは、「振り返りは授業の終わりだけではなく、途中での振り返りもあり、それは教師の投げかけが大切であることがわかった」、「小学生でもこれだけの深い考えに至ることに驚いた。中学校でもより高い思考につながるように指導したい」等の感想が寄せられ、目的に沿った研修会が実施できたと考える。

4. 今後の課題

(1) 思考力・表現力の育成について

協力校に対する授業づくりにおける継続的な支援と助言により、子供が主体的に思考する授業に変容してきており、授業の中で子供が自らの考えを相手に伝えたりノートに書いたりすることができるようになってきたが、各種調査の結果に明らかな成果としては表れていない。

思考力・表現力の育成、特に表現力には、根拠をもとに筋道立てて説明する力を育成する必要がある。今後は、思考したことを論理的に表現する力をどのように授業の中で身に付けていったらよいか、単元計画を含めて検討し、実践・検証を繰り返すことで、児童の思考力・表現力の育成、特に表現力の育成につなげていきたい。

(2) 振り返りの活用について

この研究では、振り返りを3つの視点で行い、ねらいに応じて授業の中で取り入れてきたが、振り返りをする事自体が目的となってしまったので、なぜ振り返りをするのかをより明確にさせることが課題である。

今後は、なぜその方法で振り返りをするのか、その目的を明らかにして取り入れること、またより広く一般化するためにも、振り返りのねらいをより分かりやすく焦点化させ、思考力・表現力につなげていきたい。

(3) 研究内容の一般化について

本市の学力向上における基本的な考えやその方向性は、研修会を開催し協力校の取組の成果等として公表してきたが、市全体を見ると、主体的・対話的で深い学びの視点による授業改善はまだ十分ではない。また、小学校での取組を中学校につなげることで、より効果的に思考力や表現力が育成できると考える。

今後も協力校での取組を継続し、その成果等を研修会において公表していくことや、小中の連携、特に中学校の教員に小学校での取組を周知し、中学校での指導につなげられるようにすることによって、協力校だけの取組ではなく市全体の取組として広げられるようにし、小中9年間を通して、思考力・表現力の育成を図っていきたい。

(様式2)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度委託事業完了報告書【推進地区】

都道府県名	栃木県	番号	09
-------	-----	----	----

推進地区名	足利市
-------	-----

○ 推進地区として実施した取組内容

1. 研究課題

自ら学ぶ意欲と自ら考え主体的に判断し、行動できる資質や能力を育成することは、生涯学習を充実させていくための学習指導の中心的な課題である。

したがって、内発的な学習意欲を喚起し、自ら学ぶ意欲や思考力・判断力・表現力を学力の中核をなすものとして捉え、そのことがその後の学習や生活において、生きて働くように確実に身に付けさせることが大切である。また、指導に当たっては、教師自身が教材研究を重視し、指導内容に精通するという基本的な考え方のもと、児童生徒の実態を踏まえ、一人一人のよさや可能性を引き出し、生かしながら、自ら学びとる過程を重視した指導の工夫に努めることが重要である。

(1) わかる授業の展開

- ① 基礎的・基本的な内容を確実に身に付けるための指導の充実に努める。
 - ・ 学習指導要領や児童生徒の実態を踏まえた指導内容の重点化
 - ・ 教科・領域や学年相互の関連を図った系統的な指導計画の作成
 - ・ 単元や一単位時間のねらいを明確にした単元構成の工夫
 - ・ 何を学んだかを振り返ることによる学習内容の確実な定着
- ② 思考力・判断力・表現力等を育成するための指導の充実に努める。
 - ・ 身に付けた知識・技能を活用したり、多様な考えを引き出したりできる発展的な課題の設定
 - ・ 自分の考えを自分の言葉で発表したり書いたりする等、知識・技能を活用する言語活動の充実
 - ・ 一人一人が考えを深めるための時間の確保及び考えを深めるための学び合いの場の設定
 - ・ 習得・活用・探究という学びの過程の中での、体験的な学習や問題発見・解決的な学習、探究的な活動の充実
 - ・ ICT機器の効果的な活用（「プログラミングを活用した授業研究」の指導事例の活用等）
 - ・ 「読書センター」「学習、情報センター」としての学校図書館の積極的な活用

- ③ 自ら学ぶ態度を育成し、学習意欲を高めるための指導の工夫に努める。
 - ・児童生徒の意欲を喚起し、学習内容の見通しがもてる導入の工夫
 - ・児童生徒が興味をもって思考を深めることができる発問の工夫
 - ・ペア、グループなどの学習形態を積極的に取り入れ、深い学び合いを促す指導の工夫
 - ・児童生徒相談員等によるティーム・ティーチングや実態に即した個別指導の充実
 - ・家庭と連携し「家庭学習の手引き『学びのすすめ』」等を活用した自主学習の習慣化
- ④ 縦と横の連携に努める。
 - ・学年や教科間での連携を深めることによる指導内容の充実
 - ・小中学校9年間の学習の円滑な接続を踏まえた指導内容・指導方法の充実
 - ・小学校英会話学習の実践と、中学校での指導の工夫による英語教育の充実

(2) 学びの成長の把握

- ① 一人一人の学習の習得状況を捉え、次の学習に生かすための評価方法を工夫し、学習内容の確実な定着に努める。
- ② 指導目標に即した観点別の評価規準を作成し、児童生徒の学習状況の継続的、総合的な評価に努める。
- ③ 基礎的・基本的な内容の定着と学力の向上に向け、学習指導の改善のためにテストバッテリーや全国学力・学習状況調査等の結果の分析、活用を努める。

(3) 共に学び合う人間関係づくり

- ① 一人一人の個性を尊重し、共に学び合う人間関係を育む学級づくりに努める。
- ② 意欲をもって学習に取り組めるような学習環境づくりに努める。
- ③ 教師と児童生徒、児童生徒同士の認め励ます言語環境づくりに努める。

2. 研究課題への取組状況

(1) 協力校へのかかわり

- ① 研究を推進するにあたり、協力校の実態と課題を校長や教頭、研究主任と確認し、本研究の方向性について共通理解を図った。
- ② 研究授業を行う際、市教委の指導主事が事前の指導案検討に加わり、指導助言を行った。
- ③ 協力校に訪問する前には、指導主事が本研究の進捗状況を踏まえ、成果と課題及び方向性について話し合い、指導助言の内容を確認した。
- ④ 研究授業には、市教委、県教委の指導主事が訪問し、授業を参観した。分科会において、各授業に対する指導助言を行うとともに、全体会においては、本研究の進捗状況の確認と指導講評を行った。

また、市独自の事業である「かなふり松プロジェクト」の学校訪問を通して、以下の3点については全小中学校の教員に対して重点的に指導している。

- ・導入の工夫：一人一人が「なぜだろう、やってみよう」と思うことができたか
 - ・展開：一人一人が自分の考えをもつことができたか
 - ・まとめ：一人一人が「わかった、できた」ことについて表現することができたか
特に、「表現力（書く、話す）の育成を図ること」「めあてが達成されたかどうかを見取ること」などについて意図的に指導・助言を行った。
- ⑤ 県教委と市教委で連絡を密に取り、本研究の進捗状況を踏まえ、成果と課題及び研究の方向性について共通理解を図った。

(2) 本市の取組

本市の学力向上・指導力強化支援事業「かなふり松プロジェクト」として、以下の4点を柱とし推進してきた。

- ① 「学力向上コーディネーター及び指導主事による学校訪問」では、小・中学校9年間の学びの連続性を重視し、各校年間5回の訪問を実施した。主体的に学習に取り組む態度を養うためには、児童生徒が授業で「わかった」「できた」という自信を積み重ねることが大切である。そのため、訪問では「この授業で何を学ぶのか」という明確なめあての提示、考えを深めるための学び合いの工夫、理解したことを整理する振り返り等を重点として指導し、教師の授業力の向上を図ってきた。さらに2学期からは、全国学力・学習状況調査の結果から見えた本市の課題から、「学んだことを活用する発展的な問題を積極的に取り入れること」「自分の考えを自分の言葉で発表させたり、書かせたりする場を設定すること」の2点を視点に加え、教師の授業力の向上を図っているところである。学校では授業を互いに見合ったり、教材研究の時間を確保したりする等、日々の授業を見直し、授業改善に努めている。
- ② 「学習ボランティアの配置」については、退職した教員や補助職員、保護者や学生ボランティア64名の協力を得て、14校において、放課後や夏休み、土曜日等に学習会を実施することができた。宿題や自主学習等に意欲的に取り組み、わからないところはボランティアの先生に質問する等、児童生徒が自ら学習に取り組む姿が見られた。
- ③ 「先進地の視察」では、全ての指導主事がチームを組み、他県3市の教育委員会や学校の様子を視察し、本市の課題解決のための参考となる情報を収集することができた。具体的な取組事例として各学校へ情報提供するとともに、本市の取組に生かせる点について話し合い、次年度の教育施策に繋げていきたい。
- ④ 「家庭学習の手引きの作成及び活用」については、本市の児童生徒の実態と課題を基に作成した、保護者用リーフレット「足利版家庭学習の手引き『学びのすすめ』」の活用を図った。各学校において、保護者に生活リズムの大切さや子供とのかかわり方、家庭学習のポイント等について説明し、家庭学習の啓発を図った。また、公民館の各種講座や家庭教育懇談会等において、教育長や教育委員会事務局職員のあいさつの場で取り上げ、その活用について周知した。

3. 実践研究の成果の把握・検証

(1) 「全国学力・学習状況調査」及び県が実施する「とちぎっ子学習状況調査」、市が実施する「テストバッテリー」の結果分析

- ① 平成 30 年度「とちぎっ子学習状況調査」と平成 31 年度「全国学力・学習状況調査」を比較（同一集団で、県の平均と比較）すると、国語と英語の平均正答率の差はほぼ横ばいであったが、数学においては 3 ポイント程度差が縮まった。出題形式別で見ると、各教科において記述式の設問で差が縮まった。領域別に見ると、国語の「読むこと」で 8 ポイント、「書くこと」で 3 ポイント差が縮まり、数学では「数と式」で 10 ポイント、「資料の活用」で 13 ポイント、英語では「書くこと」で 11 ポイント差が縮まっている。各教科の授業で自分の考えを書く指導を意識して位置付け、実践してきたことや、教師が振り返りにどんなことを書かせたいかを考えて授業に臨んできた結果だと思われる。しかし、いずれの項目でも依然として全国平均や県平均を下回っていることや、特に記述式の設問において無解答率が高い数値を示していることなど、課題もみられる。
- ② 平成 30 年度と平成 31 年度の「全国学力・学習状況調査」を比較すると、国語、数学において全国との平均正答率の差が開いてしまう傾向にあった。調査対象の生徒が異なるため全ての研究の結果とは考えられないが、引き続き学校全体の取組として継続していく必要がある。
- ③ 全国学力・学習状況調査やとちぎっ子学習状況調査などの結果を分析することで、教員の想定以上に無解答率が高いことや表現する力に課題があることを知ることができた。検証を行うことの重要性を確認することができた。

(2) アンケート等の実施及び結果分析

- ① 平成 30 年度と平成 31 年度の「全国学力・学習状況調査（生徒質問紙）」を比較すると、「自分には、よいところがあると思いますか」の質問で肯定的な回答をした生徒の割合が 5 ポイント程度増えている。同様に「家で、自分で計画を立てて勉強をしていますか」の質問で 9.5 ポイント増えている。また、平成 30 年度の「とちぎっ子学習状況調査」と同一集団で比較しても伸びが見られる。「山辺中のユニバーサルデザインの視点」を設定して生徒一人一人に「わかった、できた」を実感させる取組をしてきたことや、授業の終末の振り返りを確実にを行い、自分の成長を自覚できるようにしてきたことや、「表現する力を育成する」という焦点化された課題に向かって、全ての教員がそれぞれの担当教科で何ができるかを考え実践してきたことがよい影響を与えたのではないかと考えられる。
- ② 平成 31 年度の「全国学力・学習状況調査（生徒質問紙）」の「国語の授業の内容はよく分かりますか」「数学の授業の内容はよく分かりますか」等の質問で、肯定的回答が全国や県の平均を 10%程度下回っている。学習内容の定着が十分でない面も見られる。

4. 今後の課題

- 「全国学力・学習状況調査」の特に記述式の問題において正答率が低くなっていたり、無解答率が高くなっていたりする。これらの課題解決には、日々の授業において自分の考えを自分の言葉で発表させたり、書かせたりする場を設定し、学んだことを活用する発展的な問題を積極的に取り入れた学習活動を展開していく必要がある。
- 主体的に学ぶ生徒を育成するために、教師自身が教材研究に励み、単元や一単位時間の授業を構成する力を身に付け、導入の工夫や振り返ることにつながるめあての設定に一層努める必要がある。また、学んだことを書かせたり、確認テストを行ったりして、本時または本単元で身に付いたことを自覚させるための振り返りを継続して行っていく必要がある。
- 学習内容の確実な定着を図るために、一人一人の学習の習得状況を捉え、次の学習に生かすための形成的評価を充実させることや、理解不十分な生徒への個別の指導の在り方など、研究を進めていく必要がある。
- 義務教育9年間を見通した系統性、連続性のある教育内容・指導方法の工夫に努める必要がある。
- 家庭学習の習慣化を図るため、生徒が「もっとやってみたい」または「やってきてよかった」と思えるよう、授業や放課後学習での個に応じた支援や、保護者への協力の呼びかけなど、工夫をしていく必要がある。
- 本研究で得た成果を継続、さらには市全体で共有し、日々の授業へ定着させ、日常的な取組にしていくことが重要である。
- 市の事業「かなふり松プロジェクト」を通して、市内33校の学力向上に関する取組を支援するとともに、教師一人一人の指導力の向上に向けた取組を推進していく。
- 令和2年度からは年間の学力向上に関する検証改善サイクルに、全国学力・学習状況調査の自校採点の実施と、足利市学力調査を位置付ける。このことにより、年間を通して、検証を重視した、市独自の検証改善サイクルを構築できると考える。特に、1月に実施予定の足利市学力調査結果の活用を通して、学校全体の課題解決が図られているか、当該学年の学習内容が身に付いたかどうかなどを確認するとともに、定着が図られていない学習内容については、教師自身がこれまでの学習指導を見直しつつ、2月、3月で補充学習を充実させていく。このような取組により、児童生徒が自信をもって進学、進級できるように支援していきたい。

(様式3)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度委託事業完了報告書【協力校】

都道府県名	栃木県	番号	09
-------	-----	----	----

協力校名	栃木県鹿沼市立さつきが丘小学校
------	-----------------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

平成29、30年度全国学力・学習状況調査の教科に関する調査の結果から、「活用」の力、すなわち、知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な問題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力に課題があることが分かった。

また、平成30年度の質問紙調査の授業に関する質問で「当てはまる」と答えた児童の割合の全国との比較では、「算数の勉強は好きか」、「算数の授業で新しい問題に出合ったとき、それを解いてみたいと思うか」の、算数に対する意欲や関心は全国平均より高いが、「算数の授業で公式やきまりを習うとき、そのわけを理解するようにしている」、「算数の授業で問題の解き方や考え方が分かるようにノートに書いている」の質問では全国平均より低く、算数科における思考や表現に関する課題があることが分かった。

2. 協力校としての取組状況

○研究の重点

「振り返り」を生かした授業改善による思考力・表現力の育成と学力定着

平成30年度、協力校においては主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業実践を行い、また、「振り返り」については、ワーキンググループによる実践と検証を行ってきた。今年度は、昨年度の取組に加え、「振り返り」の効果的な活用についての実践・検証を進めることで、児童の思考力・表現力の育成と学力定着を目指して取り組んできた。

(1) 子どもの思考力・表現力の向上と学力の定着を目指した授業改善と指導力向上のための校内研修の実施

ア 授業づくり

協力校では、学校課題を「子供と創る算数授業～主体的・対話的で深い学びを目指して～（第2年次）」と題し、数学的な見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かうなどの「深い学び」が実現できているかといった視点からの授業改善を試みた。授業の手法や技術の改善のみを意図するのではなく、この時間に身に付けたいものは何か、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」とは、どのような児

童の姿なのかといった視点で、授業改善を進めていった。

具体的には、各学年で研究単元を設定し、単元全体や系統を意識した授業づくりをしていった。まずは、単元という一定のまとまりの中で、どの時間にどの能力を育成するのかを明確にするために、単元計画を見直し、育成すべき資質・能力をバランスよく配置した。次に、それぞれの時間で、ねらいは何か、そのためにどんな問題を設定し、何を考えさせればよいのか、といった一連の教材研究をしっかりと行った。そしてその時間を「主体的・対話的で深い学び」にするためには、子供のどのような姿が見られるとよいのか、そのためにはどのような手立てが必要かを考え、授業を構想していった。それを共有化できるよう、それぞれの授業のねらいと問題、授業の最後では児童のどのような姿が見られるとよいかを検討したことを「単元構想シート」としてまとめた。そして、研究単元で学んだことを、他の授業にも派生させ、日々の授業づくりに生かしていく、という流れで授業改善を行っていった。

<各学年の研究単元>

学年	単元名
第1学年	ひきざん
第2学年	ひきざんのひっ算
第3学年	分数
第4学年	小数のかけ算とわり算
第5学年	単位量あたりの大きさ
第6学年	資料の調べ方

<単元構想シートの例>

⑦ $3/4$ と、もとの長さの $3/4$ の長さについて考える。	⑧分母が10の分数と1/10の位までの小数の関係について理解する。	⑨分数の加法の計算の仕方について理解し、それらの計算ができる。	⑩分数の減法の計算の仕方について理解し、それらの計算ができる。	⑪学習内容の定着を確認し、理解を深めさせる。
<p>□めあて（観点） 3/4mの大きさについて考えよう。（考）</p> <p>□問題 3/4mのテープをつくりましょう。</p> <p>□まとめ ・$3/4$mとは、もとの長さ1mの$3/4$の長さ。 ・$1/4$mの3こ分の長さ。</p> <p>□振り返り ・大きさは決まっている分数には単位が付く。 ・もとにする大きさを考えないと間違える。 ・$3/4$mと、$3/4$は意味が違う。</p>	<p>□めあて（観点） 分母が10の分数の大きさを、小数の大きさと比べてみよう。（知）</p> <p>□問題 分母が10の分数の大きさについて考えましょう。</p> <p>□まとめ ・$1/10=0.1$ ・小数第一位を1/10の位ともいう。</p> <p>□振り返り ・1/10より大きい大きさを表す。小数と分数で表し方が2つあるものがある。小数第一位と1/10の位は同じ。</p>	<p>□めあて（観点） 分数でもたし算ができるか調べよう。（考・知）</p> <p>□問題 ジュースがパックに$3/10$L、びんに$2/10$L入っています。あわせて何Lありますか。</p> <p>□まとめ ・$1/10$Lの何こ分かで考えれば、たし算ができる。</p>	<p>□めあて（観点） 分数でもひき算ができるか調べよう。（考・知）</p> <p>□問題 ジュースが$4/5$Lあります。1/5L飲むと、のこりは何Lになりますか。</p> <p>□まとめ ・1/5Lの何こ分かで考えれば、ひき算ができる。</p>	<p>□めあて（観点） 学習のしあひをしよう。（知）</p> <p>□問題 P.58しあひの問題</p>
<p>※評価の観点 （知）算数への関心・意欲・態度 （考）数学的な考え方 （技）数量や図形についての技能 （知）数量や図形についての知識・理解</p>				

授業後の児童の姿を明確にし、このような姿が見られるためにはどのような授業を行ったらいいかという視点で授業づくりを行った。

イ「振り返り」を生かした授業改善

平成30年度のワーキンググループの取組により、発達段階に合わせた振り返りの視点が必要であること、振り返りをする中で何をねらうかによって、児童に返すコメントも変わってくる、等の課題が見えてきた。

そこで、まず「振り返り」についての共通理解を図り、単に授業後に感想を書かせるのではな

く、目的意識をもった振り返りができるようにした。「振り返り」はその目的によって、振り返るタイミングや方法が変わってくる。そこで、何をねらって振り返りをするのかを明らかにするため、下記の3つの視点で振り返りを行えるようにした。

① 1時間の学びの過程を振り返る（授業をダイジェストで振り返る）

授業の最後に1時間の学びの過程をダイジェストで振り返る活動を行った。そのために、授業中での行われた児童とのやりとりを、板書に残すようにし、1時間の授業がどのように行われてきたのか、板書を見れば一目で分かるようにした。児童は直近の記憶は鮮明だが、少し前の記憶は徐々に曖昧になってしまうため、授業の最後に振り返りを行うと、直前のまとめ（結果）だけに目を向けがちになってしまう。そのため、授業をダイジェストで振り返る活動を取り入れることによって、結果だけでなく、結果に至る思考の過程に目を向けられるようにした。

② 児童が自らの学びを振り返る

全体で学びの過程を振り返った後、自らの学びを振り返る活動を取り入れた。そのことによって児童が1時間の学びを実感できるだけでなく、書かれている内容によって、教師がねらいを達成した授業になったかを確認することができる。単元構想シートの「振り返り」の部分でねらった姿が見られたか、見られなかった場合は、授業のどこを改善していったらよいか、と考えることで、次時以降の授業づくりや指導に生かせるようにした。そのため、ただ単に感想を書かせるのではなく、振り返る視点を与えて、より効果的な振り返りになるようにした。

③ 授業展開の文節ごとに、既習事項や自らの思考を振り返る

振り返りは、授業の最後にするものだけではなく、問題解決の過程で既習の知識や経験を振り返ったり、自らの見方や考えを振り返ったりすることも、「振り返り」であるととらえた。これを意識させることで、児童が何を考えたらよいかを明確にするようにした。また、児童の見方や考えを友達に伝える場面では、それを教師が解説し直したり上手に説明したりせず、問い返しを行うことによって、素朴な表現を数学的表現に変容させ、表現力の育成につなげられるようにした。

（2）大学の研究者との効果的な連携・協力による指導の充実

大学の研究者をアドバイザーとして授業を構想する段階から指導・助言を仰ぎ、主体的・対話的で深い学びの実現と振り返りの活用による、思考力・表現力の育成を目指した授業づくりをしていた。また、研究授業で指導をいただくことで、それまでの取組の評価し、改善を図った。

3. 取組の成果の把握・検証

（1）学力調査の結果から

ア 平成31年度全国学力・学習状況調査の結果から

小学校第6学年の児童を対象とした平成31年度全国学力・学習状況調査の教科に関する調査において、全国平均正答率を比較するとやや優れているという結果であった。

設問ごとに見ると、「2010年の市全体の水の使用量が1980年の市全体の水の使用量の何倍か読み取ることができる」及び「示された場面において、複数の数量から必要な数量を選び立式することができる」においては、全国より5ポイント以上上回り、優れている状況にあった。一方、「示された図形の面積の求め方を解釈し、その求め方の説明を記述できる」においては、5ポイ

ント以上下回っていた。解答類型を見ると、式が何を示しているかの記述が不十分な児童が多く、表現力に課題があることが分かった。

児童に対する質問紙調査の算数に関わる項目群では、ほぼすべて全国の肯定的な回答の割合を上回っていた。特に、算数における思考力・表現力に関わる項目である「算数の問題の解き方が分からないときは、諦めずいろいろな方法を考えますか」の質問に対しては85%、「算数の授業で公式やきまりを習うとき、そのわけを理解するようにしていますか」の質問に対しては、92%、また、「算数の授業で問題の解き方や考え方が分かるようにノートに書いていますか」の質問に対しては、88%の児童が肯定的な回答をしており、授業改善の成果が見られたと考える。

イ 栃木県「とちぎっ子学習状況調査」の結果から

小学校第5学年の児童を対象とした栃木県「とちぎっ子学習状況調査」の教科に関する調査における算数の調査結果は、県の平均正答率をやや上回っている状況であった。

児童に対する質問紙調査では、「授業の中で目標（めあて・ねらい）がしめされている」の質問に対して91%の児童が、「授業の最後に、学習したことを振り返る活動をよく行っている」の質問に対して91%の児童が、「算数の授業で問題の解き方や考え方が分かるようにノートに書いています」の質問に対して86%の児童が、肯定的に回答している。ここから、授業のねらいや振り返り、思考の過程を大切にされた授業が行われてきたことが分かり、授業改善の成果が見られたと考えられる。

(2) 授業改善と指導力向上のための校内研修の実施から

ア 授業づくりの視点から

授業づくりでは、その時間のねらいは何か、そのためには何を考えさせればよいのかという算数科の本質を大切にしながら、「主体的・対話的で深い学び」とは児童のどのような姿が見られることなのか、そのためにはどのような手立てが必要か、という視点で進めてきた。また、そのために効果的な振り返りはどのようなものかについて、実践・検証を行ってきた。

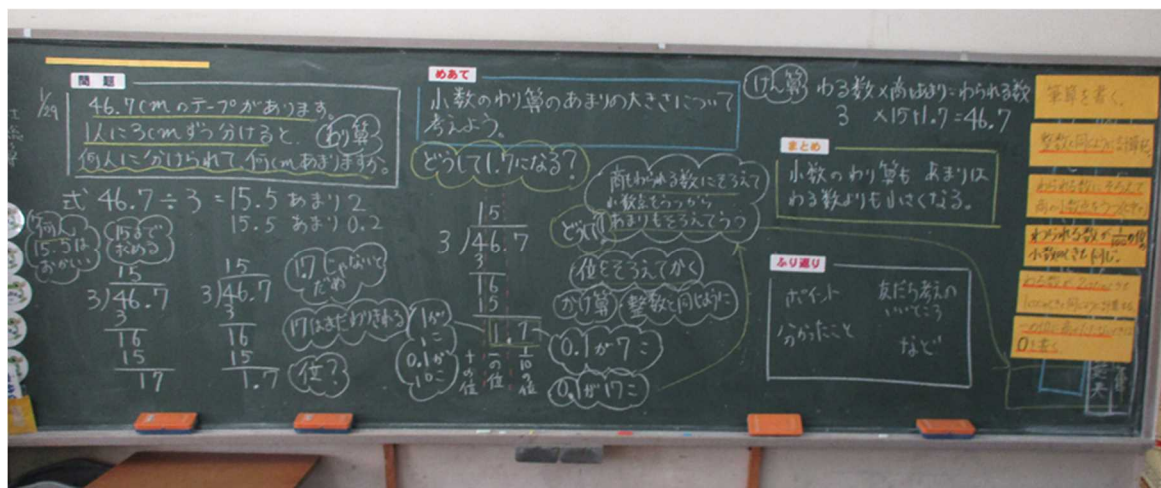
アドバイザーが授業づくりから関わることによって、単元を通して計画的に育てたい資質・能力を育成すること、その上で本時のねらいは何か、そのためにどのような問題で何を考えさせたらよいのか、という授業づくりのポイントが明確に示されたこと、協力校の教員が、講話等によりそれらのことについて理解していたこと等から、意味のある授業づくりとなった。

また、「主体的・対話的で深い学び」にするために、子供の主体的な姿とは、対話的な姿とは、深い学びになるにはどのような子供の姿がみられることなのか、を検討しながら授業づくりを進めてきた。このことは子供の姿から授業を見直すことであり、子供主体の授業づくりにつながったのではないかと考える。授業のゴールでの児童の姿を見据え、そのためにどのような活動が必要かと授業を構想したことで、本質を大切にされた授業づくりができ、授業者の授業力の向上にもつながったのではないかと考える。

イ 「振り返り」を生かした授業改善の視点から

授業の最後に、1時間の学びの過程をダイジェストで振り返ること取り入れるたが、それに

より、授業の最後に残る板書が今までと大きく変化した。それまでは、問題やめあて、解決した結果、まとめが残されていたが、「この場面でどのようなことが話題になって、このように考えた」というような解決の過程を振り返るために、子供の疑問やそのときの考えを板書に残すようにしたため、問題解決の流れが授業の最後に見えるようになった。すると、結果ばかりでなく、問題解決の過程にも目が向くようになり、子供だけでなく教員の意識の変化につながったと考えられる。



授業後の板書（令和2年1月）

児童が自らの学びを振り返ることに関しては、継続して書く活動を行ってきたことで、自分の考えやそのときの思いを文章で表現できるようになったこと、その振り返りによって、子供の学びを把握できるようになったこと、それを次時に生かせるようになったことが、取り組んだ成果として挙げられる。また、単元構想シートで、ねらった子供の姿を明確にしたことで、ねらいが達成されたところと不十分だったところをはっきりさせることができ、効果的に授業改善を行うことができた。

（振り返り）
 友達のことを聞いて、人によ、
 見やすいグラフや表がうんを
 なく感じた。グラフと表を比べ、
 ドットプロットは、まとまりが目
 ざら。グラフと表の
 の見やすい。グラフと表の
 うすがる。グラフと表の

（振り返り）
 わたしは、グラフが一番は
 やりやすいと思った。なぜなら、
 “人が言ったように”105
 ～110の間が大きい。110～115が
 10以内で、でも、人の
 を見て、グラフと表を比べて、
 ドットプロットや表を見たので

児童が自らの学びを振り返った記述の例。児童は、授業で分かったことだけでなく、友達の良い考えや説明の仕方の良さなど、他者のよさを実感したり、自分の改善点や疑問点、これから考えてみたいこと等が書かれるようになったりした。授業者は、その姿や振り返りの内容から、児童一人一人の状況をつかみ、次時に生かすことができた。

既習事項を振り返ることに関しては、今までは教員が事前に必要な既習事項を用意して壁に掲示するなど、教員が一方的に与える方法をとっていたが、問題解決に必要な既習事項を児童自らがノートなどをたどって振り返る方法に変えるようにした。その結果、教員に言われなくても、わからないときは自らノートをたどって振り返る姿を見ることができるようになり、一人で問題解決する方法を身に付けることにつながったと考える。

また、問題解決の文節ごとに、子供がどう考えたのかを表現させるようにした。その際には、子供の素朴な表現を問い返し、数学的な表現に変容させることを意識的に行った。その結果、教師の説明の時間が減り、子供が思考する時間が増えた。このことから、知識を教える授業から子供が思考する授業へと変容してきたと考える。

4. 今後の課題

(1) 振り返りの活用について

今年度、振り返りの視点を3つ示し、その活用に取り組んできた。子供の思考力・表現力の育成につなげることと教員の授業改善につなげることが目的であったが、振り返りをするそのものが目的となってしまうたり、教員の取り組みやすい振り返りをそれぞれが行ったりしたことで、振り返りのねらいがあいまいになってしまったり、学校全体としての成果がはっきり見えなかった点が課題である。

今後は、何のために振り返りを取り入れるのかを明確化し、そのためにどう振り返りを活用するのかをはっきりさせること、また、どの教員にも分かりやすく効果的に活用することができるよう、ねらいを焦点化して取り組んでいきたい。

(2) 表現力の育成に向けて

授業改善と指導力向上のための校内研修により、子供の思考を大切にした授業が行われるようになった結果、自分の考えを言語化し、相手に伝えたりノートに書いたりすることができるようになったが、調査結果には明らかな成果として表れていない。

今後は、児童が自分の力で、数学的な表現を用いて、根拠を明らかに筋道立てて説明する力を身につける、という視点で今一度単元計画を見直し、意図的に表現力の育成を図っていきたい。

(様式3)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度委託事業完了報告書【協力校】

都道府県名	栃木県	番号	09
-------	-----	----	----

協力校名	栃木県足利市立山辺中学校
------	--------------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

中学2年生を対象とした平成30年度とちぎっ子学習状況調査（以下、県版調査）の教科に関する調査では、多くの教科で県平均正答率を下回る結果が見られた。

誤答分析の結果から、定期考査では、比較的正答率が高かった基礎的・基本的な知識に関する問題であっても、県版調査（4月実施）では、関連する問題の正答率が、想定よりも低くなるなど、知識等の定着が図られていない状況や、記述式問題において無解答の割合が高い状況が見られた。また、全国学力・学習状況調査の教科に関する調査結果と関連付けて分析すると、中学3年生でも既習事項の定着や自分の考えを表現する力の育成が図られていない状況が見られた。

県版調査における生徒質問紙調査については、特に以下の項目について、県の回答状況と顕著な差が見られた。

単位：ポイント

	【生徒質問紙調査】 授業の最後に振り返る活動をよく行っていますか。			
	はい	どちらかといえば はい	どちらかといえば いいえ	いいえ
本校	9.7	28.2	35.4	26.2
県全体	40.1	30.6	20.2	9.0

	【生徒質問紙調査】 勉強をしていて、おもしろい、楽しいと思うことがありますか。			
	はい	どちらかといえば はい	どちらかといえば いいえ	いいえ
本校	20.5	37.9	21.5	20.0
県全体	59.3	26.4	9.0	5.2

そこで、校内研修を通して、

- ・学習指導を工夫・改善することを通して、学習内容の確実な定着を図ること

特に、本校の学校課題と関連することとして、「自分の考えを分かりやすく表現する力の育成」を各教科の特質を踏まえつつ、全学年・全教科等で実践していくこと。

- ・「個に応じた指導の充実」を通して、自己有用感や学習意欲を高めること

以上の課題や方向性を共有し、学校全体で取り組むこととした。

その後、学校全体の取組の充実に向けて、早稲田大学教職大学院 田中博之先生や文部科学省小栗英樹調査官から御講話いただいた内容や県及び市教育委員会事務局学校教育主管課担当指導主事からの指導内容を踏まえ、以下の2つの内容を柱に、「教師が変われば、生徒が変わる」の合い言葉のもと、研究を推進することとした。

- 自己有用感や学習意欲を高める学習支援の充実

～主体的・対話的で深い学びの視点からの授業づくりを通して～

- ・新しいユニバーサルデザインの考え方に基づく、個に応じた指導の充実
- ・「できた、分かった」を実感できる振り返る活動の充実

- 「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善

- ・授業構想シートの作成・活用
- ・学習評価からの授業改善 ～自分の考えを分かりやすく表現する力の育成に向けて～

2. 協力校としての取組状況

- (1) 自己有用感や学習意欲を高める学習支援の充実

～主体的・対話的で深い学びの視点からの授業づくりを通して

- ① 新しいユニバーサルデザインの考え方に基づく、個に応じた指導の充実

本校では、平成30年度より、教師の資質・能力向上のために、教職員一人一人が設定した課題解決に向けて先進校視察を行っている。先進校における取組を踏まえ、本校の実態に合わせ、改善を図りながら取り入れたものの一つが「山辺中版ユニバーサルデザイン」である。

「山辺中版ユニバーサルデザイン」は、教室環境づくりの視点だけでなく、全ての生徒が授業に主体的に取り組むことができるように「積極的なユニバーサルデザイン」として、授業づくりの視点から支援内容を検討し、4つの項目で整理している。

項目	概要	具体例
①刺激への配慮	集中し、落ち着いて学習に取り組む環境にするには、教室の刺激の量を減らす配慮が必要です。生徒の注意をそらしたり大切な情報をわかりにくくする余分な刺激（情報）を取り除き、必要な情報に集中できる教室環境を作ります。 ①目障りとなる視覚刺激 ②不要で不快な聴覚刺激	視覚：簡素な黒板周り、棚に目隠しカーテン 聴覚：椅子の脚にテニスボール

「山辺中版ユニバーサルデザイン」 教室環境づくり

項目	概要	具体例
①授業の見通しの提示	授業のめあてや流れを明示することで、見通しを持って授業に臨むことができ、自主的な学びが期待できます。学習活動の始まりと終わりを明確に示し、いつまでに何をするのか、どこまでやれば終わりなのかなど、具体的に示すことが生徒の学習への意欲を持続させます。	<ul style="list-style-type: none"> ・授業のめあてや流れの掲示 ・「授業の今」を示す ・アラームの活用
②板書の工夫	板書の目的は、視覚に訴え、思考を深めることにあります。そのままでは消えてしまう言葉のやりとりを板書の形に整理することで、生徒の思考の拠り所となります。	<ul style="list-style-type: none"> ・板書計画とノートの効果的活用 ・めあて、ポイントなどの表示 ・チョークの色（白と黄が基本） ・板書は残す ・ホワイトボード、プロジェクターの活用
③指示の出し方の工夫	聞き漏らしを無くし、学習に集中させるためには、注意を喚起し、生徒自らが対象に意識を向け、的確な指示をすることが大切です。 具体的には、 ①注意を促す指示や合図が明確で具体的である。 ②ルール化する。 ③自ら注意が向けられた時はほめる。 ④聞く側にとって要点を整理しやすく、いつまで集中して聞いていればいいのか終わりが見通せる	<ul style="list-style-type: none"> ・注意喚起 ・沈黙の活用 ・視覚的情報の活用 ・話を「聞く」と「板書を写す」場面を分ける ・同じ立ち位置 ・端的な説明 ・活動の始まりと終わりを明確に示す ・具体的に話す（×「しっかり」 ×「ちゃんと」） ・肯定的な表現（×「走るな」、 ○「廊下は歩きます」） ・「1つめ…、2つめ…」のように列挙法を活用する
④参加の促進	すべての生徒が授業に参加する工夫をする。 ①学習へのモチベーションを高める。 ②間違いや失敗が許容され、試行錯誤をしながら学べる。 ③多様な学習スタイルがある。 ④学習のポイントをつかめる教材の工夫 ⑤参加のための支援、援助などがある。	<ul style="list-style-type: none"> ・ヘルプカード、ヒントカードの活用 ・多様な解決方法を示す ・机間指導 ・座席の配慮、学びあい

「山辺中版ユニバーサルデザイン」 授業づくり

「山辺中版ユニバーサルデザイン」における授業づくりの視点の活用を通して、毎時間の授業において授業者が意識化を図っている。



左は、道徳の授業において、意見交換をしながら学びを深めている場面である。これまでの友達関係を考慮し、「座席の配慮（④参加の促進）」を取り入れたことにより、授業において発表をすることが苦手な生徒も、和やかな雰囲気の中で、自分の気持ちと向き合いながら、友だちの意見を受け入れつつ、自分の意見を発表するなど、考えを深めることができていく様子が見られた。



左は、全ての生徒が、粘り強く学習課題の解決に向けて取り組むことができるよう、「ヒントカードの活用（④参加の促進）」を取り入れている場面である。実践した国語科の授業者の感想として、「日頃の実態の把握が十分にできてないと、適切なヒントではなくなってしまい、主体的な学びにつながらなくなる。日々の見取りと、問題に対する生徒の反応を想定することが大切であることを改めて学んだ。」とあった。ヒントカードの作成を通して、教員が生徒の反応を予想することの大切さや難しさなど、授業づくりの面でも効果があったと

考えている。また、こうした積み重ねが、生徒の資質・能力を育てていくと捉えている。

② 「できた、分かった」を実感できる振り返る活動の充実

生徒が本時の授業を通して、どのような課題に向き合ったのか、どのようなことができるようになったのかを実感することができるよう、日々の授業において、「めあて」の工夫や終末における振り返る活動の充実を図ってきた。

特に、振り返る活動の充実に向けて、振り返りにおける「望ましい生徒の表現」を検討し、学習指導案上に記載することとした。（下参照）

<p>・本時のまとめ</p>	<p>・本時をまとめ、次時の学習内容を知る。</p>	<p>振り返りの望ましい生徒の表現 例：「回路計を使ってショートしていないかなど正しく点検することができていれば、安全な電気機器を制作したことにつながることがわかった」</p>	<p>5 一斉</p>	
----------------	----------------------------	--	-----------------	--

↑
「評価の判断基準の具体的設定」からの授業改善
本時のめあてに対して、『自分の考えを、根拠を基に説明しているか』先生が見取る基準を考え、振り返りでの「望ましい生徒の表現」の例を掲げる。
例：「～を試したら、～ができるようになった。」
「～と～が影響しあって、～な社会が形成され、人々の生活が良くなった。」
振り返りは感想程度でない。

学習指導案 （一部抜粋）

このような実践を通して、授業者は、振り返る活動において、生徒がどのようなことができる（書ける）ことを目指すのかなどを検討することで、授業者が、本時の授業で育成を目指す資質・能力を明確にすることができたと考えている。

また、生徒は、振り返る活動を通して、自分の言葉で分かったことをまとめたり、本時の学習内容に関する確認問題を解いたりすることで、学習内容の定着が図られることにつながると期待している。今後は、本指導案を活用し、「望ましい生徒の表現」を意識することで、育成を目指す資質・能力を明確に授業実践に取り組んでいくとともに、振り返る活動が、授業と家庭学習をつなげるものとなるよう、学校全体で工夫して、実践をしていきたい。

相手の**コート**に**反応**して、ボールが落ちてくる所に動き、良い体勢でレシーフをすれば、セッターの頭上にパスを出せました。レシーフするボールの回転をなくして、セッターの少し上にレシーフをすればセッターがミスしやすくなると思いましたが、3人の連携も大切で、一人がレシーフをミス、セッターは反応してパスをあげて3人目はスパイクを打つので、一人がその姿に**役割**を**決め**、**声を揃**して**協力**して連携してやることを思いました。

保健体育科による振り返る活動

(2) 「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善

① 授業構想シートの作成・活用

学校全体での研究推進に向けて、全ての教科で対応できる「『主体的・対話的で深い学び』が実現できた生徒の姿」（以下、授業構想シートとする）を整理し、学習指導案と関連付けて示すこととした。

「主体的な学び」が実現できた生徒の姿	手立て
①興味や関心を高めている ・好奇心を高めている ・感動している	・疑問を感じている ・問題を見いだしている
②見通しをもつ ・本時（本単元）のめあてをつかんでいる ・仮説を立てている	・解決方法を考えている
③自分と結び付ける ・生活や社会と結びつけて考えている ・自分のこと、自分の将来と結びつけて考えている	
④粘り強く取り組む	
⑤振り返って次へつなげる ・新たな見通しをもっている	
「対話的な学び」が実現できた子どもの姿の例	手立て
①互いの考えを比較する ・複数の考え方の共通点（相違点）に気づいている ・自分の考えと他者の考えの共通点（相違点）に気づいている ・複数の意見から、適切なものを選択している	
②多様な情報を収集する ・生徒同士の対話から情報を収集している ・社会人との対話から情報を収集している ・複数の資料から情報を得ている	
③思考を表現に置き換える ・自分の思いや考えを、言葉、絵、数式、身体、音などで表現している	
④多様な手段で説明する ・適切な手段で説明している ・効果的に伝える工夫をしている	
⑤先哲の考え方を手掛かりとする ・先哲の作品、思想から自分の考えを広げ深めている	
⑥共に考えを創り上げる ・合意形成をしている ・最適解を見出している	
⑦協働して課題解決する	
⑧教職員との対話を手掛かりとする	
「深い学び」が実現できた子どもの姿の例	手立て
①思考して問い続ける ・得られた結果について再考している ・よりよい結果に近づけようとしている ・別の解を見出そうとしている	
②知識、技能を習得する ・意味を理解した上で知識を身につけている ・目的に沿った適切な技能を身につけている	
③知識、技能を活用する ・既習事項と関連づけて考え、理解し、表現している	
④自分の思いや考えと結び付ける ・わかったことと、自分の思いや考えを結び付けている	
⑤複数の資料から自分の考えを形成する	
⑥新たなものを創り上げる	

授業構想シート

特に、「対話的な学び」については、何のために話し合う活動を行うのかなど目的が曖昧な状態で、授業者が発問をしたり、話し合う活動させたりをすることがある。このシートを活用し、対話的な学びが実現できた子どもの姿はどのような姿か、その実現のための手立てとしてはどのようなことを考えることができるかなど、目的と手段を明確にできた意義は大きいと考える。



② 学習評価からの授業改善 ～自分の考えを分かりやすく表現する力の育成に向けて～

これまでの調査の結果から、評価の観点「思考・判断・表現」における記述式問題の結果を見ると、多くの教科で無解答率が高い状況がみられる。

校内研修では、各教科の記述式問題を取り上げ、「なぜ、本校の生徒は、自分の考えを書きことができないのか」「自分の考えを表現できる力を育成するには、各教科でどのような工夫かできるか」などを話し合い、学校全体で「自分の考えを分かりやすく表現する力の育成」に向けて、各教科で現実的に何ができるかを考え、実践することとした。

特に、「思考・判断・表現」を目標とした授業では、何をどのように書けることを目指すのかといった評価する際に判断する基準を明確にすることが大切であると考える。判断基準を明確にすることにより、日々の授業における生徒への声かけ、発問の工夫につながったと捉えている。

また、これまでの全国学力・学習状況調査や県版調査の結果から、無解答率が高かったり、正答率が低かったりするなど課題の見られた問題を参考に、定期考査の問題を作成・出題をするなど、生徒の変容などを把握してきた。

現段階では、成果といえる顕著な変容は見られない。今後、複数の教科担当で質問・採点を行うことで、より妥当性のある評価とするとともに、評価を通して学習指導の改善・充実につなげることができるよう、取組の改善・充実を図っていきたい。

ひとみさんたちは、アメリカの工業の変化について調べるために、地図と資料1～資料3を集めて話し合いました。次の会話文の ① に、アメリカの工業の中心となる地域がどのように変化してきたかを簡潔に書きなさい。また、② には、変化した理由を簡潔に書きなさい。

ひとみ：資料1を見ると、アメリカで工業生産額の割合が高い地域は1973年と2009年ではずいぶん変わっているわね。
 さとし：そうだね。1973年に36.6%を占めていた中西部の割合が、2009年には29.9%に減少しているよ。北東部の割合も減っているね。
 ひとみ：逆に1973年に26.8%だった南部の割合が、2009年には1.5倍近くに増えているわ。
 さとし：このグラフから、アメリカの工業の中心となる地域は①ということがわかるね。
 ひとみ：どうしてそうに変化したのかな。
 さとし：資料2と資料3を見れば、その理由の1つがわかるんじゃないかな。
 ひとみ：資料2ではアメリカのアフリカ系とヒスパニックの地域別人口が、資料3では平均年収の違いが示されているわ。アフリカ系とヒスパニックの方が、ヨーロッパ系より賃金が安いと考えられるわね。
 さとし：そうか。②から、企業は賃金の安い南部に進出したんだね。その結果、この地域の工業生産額の割合が急増したということが理由の1つとして考えられるね。

地図

資料1 アメリカの地域別工業生産額の割合の変化

地域	1973年	2009年
中西部	36.6%	29.9%
北東部	23.0%	13.9%
南部	26.6%	38.4%
太平洋	11.2%	13.6%
山岳地域	2.4%	4.2%

資料2 アメリカのアフリカ系とヒスパニックの地域別人口の変化

資料3 アメリカにおけるヨーロッパ系、アフリカ系、ヒスパニックの平均年収の推移

県版調査問題（社会科）

県版調査問題（社会科）

3. 取組の成果の把握・検証

これまで学校全体で継続して取り組んできた結果、県版調査における先に挙げた項目内容について、同一集団（第2学年）比較をすると、以下のような変化が見られた。

単位：ポイント

	国語	社会	数学	理科	英語
平成30年度と 令和元年度の比較	+1.9	+6.3	+3.9	+3.2	+6.6

(令和元年度の県平均との差－平成30年度の県平均との差)

単位：ポイント

【生徒質問紙調査】 授業の最後に振り返る活動をよく行っていますか。				
	はい	どちらかといえば はい	どちらかといえば いいえ	いいえ
平成30年度	9.7	28.2	35.4	26.2
令和元年度	47.4	34.4	13.0	5.2

【生徒質問紙調査】 勉強をされていて、おもしろい、楽しいと思うことがありますか。				
	はい	どちらかといえば はい	どちらかといえば いいえ	いいえ
平成30年度	20.5	37.9	21.5	20.0
令和元年度	42.7	37.0	14.1	6.3

教科に関する調査の結果については、同一学年での比較であり、生徒が異なることから、単純な比較はできないが、全ての教科において、県全体と本校の平均正答率の差が小さくなっている。「教師が変われば生徒が変わる」を合い言葉に、全ての教職員が全ての教科において、実践し続けたことによる成果であると考えている。

また、生徒質問紙調査の結果については、いずれの項目においても、肯定的回答割合の増加が見られる。このことについても、学校全体で個に応じた指導や、学習内容の確実な定着に向けた振り返る活動の充実を測ってきた成果であると捉えている。

今後とも、全国学力・学習状況調査及び県版調査を関連付けて分析をするなど、同一集団及び同一学年での比較を通して、学校全体の取組の成果を検証していくこととする。

4. 今後の課題

(1) 「教師が変われば生徒が変わる」の意識の継続を

生徒の最大の環境は教師である。目の前のこの子に、どうしたら力を付けてやれるか、一人一人を真摯に見つめ、常に自己変革を図れる教師集団でありたい。

(2) 「山辺中のユニバーサルデザインの視点」の重点化を

日々の授業の中で着実に生徒に力を付けるために重点化を図っていきたい。

(3) 「山辺中指導略案の特徴」を常に念頭に授業を

単元を見通した計画、対話を重視した指導方法のあり方、「望ましい生徒の表現」を念頭に置き授業に臨む、など、無理のない範囲で、真摯な取組の継続を図りたい。

(4) 山辺中版「主体的・対話的で深い学びが実現できたときの姿」を意識して

検証を重ねながら、生徒の豊かな学びが成立したときの姿を思い浮かべ、生徒が成長することを何よりの喜びとし、授業実践に努めたい。

